

「データベースはカネがかかる」という常識を打ち破る 保守サポートの無償化を実現した Actian Zen / PSQLデータベース

あらゆる企業システムを作るうえで欠かすことのできないデータベース。そのデータベースを利用していくには、多額の保守サポート費用を払い続けなければならない。これは企業の情報システム部門にとって、ある意味“常識”だった。だが世の中にはそんな常識を打ち破り、保守サポートを無償化したデータベースがある。それがエーजीテックの「Actian Zen/PSQL データベース」だ。

知ってびっくり、 高額なデータベース保守費用

サーバー仮想化やクラウドの普及により、企業システムを構築する際の初期投資費用は以前に比べてずいぶん軽減されるようになった。しかし、ハードウェアの費用がいくら減ろうとも、企業システム上で稼働するソフトウェアの費用は以前とあまり大差がない。なかでも企業システ

ムにとって重要な役割を担うデータベースは、最もコスト削減効果を実感できないソフトウェアの一つだろう。

企業システムで扱う情報を格納・保管するデータベースは、企業システムを支える屋台骨とも言える重要な存在だ。だがデータベース製品を利用するには、初期導入時にかかるライセンス費用に加え、年間保守サポート費用をベンダーに納めなければならない。これはそのデータベース製品を使っている限り、延々と続いていく。企業システムの運用管理を担当する情報システム部門は「データベースはカネがかかるもの」と半ば諦めながら、そんな現実を当たり前のよう受け入れてきた。

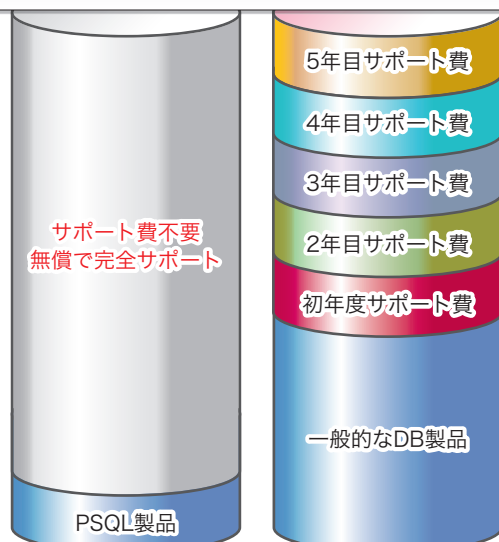
では、実際にデータベースはどのくらいの費用がかかっているのだろうか。出荷金額ベースで世界トップシェアを誇る「Oracle Database Enterprise」の例を挙げてみよう。

Oracle Database Enterprise の製品ライセンス価格は5,163,000円（プロセッサ価格）。これに初年度22%、つまり年間1,135,860円の保守サポート費用が追加される。Oracle Databaseでは、この保守サポート契約を結ぶことが前提となっており、契約がなければ技術的な問い合わせも、更新プログラムの入手も不可能なのだ。しかも、この保守サポート費用は「更新時調整率」という名目で、毎年2～3%（率は毎年7月に国別に決定）も値上げされていくというオマケまで付いてくる。

これは Oracle Database に限った話ではなく、他のデータベース製品も程度の差こそあれ、保守サポート費用が必要なのは変わらない。基本的に無償で利用できる PostgreSQL のようなオープンソースのデータベースを導入したとしても、情報システム部門が自分たちで保

5年目におけるTCOの格差

長期間にわたるデータベース運用の中で、考えなければならない保守サポート費の実態



守メンテナンスできる能力を持ち合わせていなければ、商用の保守サポート契約を結ぶことになる。その場合も年間数十万円の費用（ベンダーによって異なる）を覚悟しなければならない。

もちろん、ベンダーがデータベースを製品化するには莫大なコストがかかっていることは理解できる。その投資の回収と現製品の改修、さらに次期新製品の開発のためには、ライセンス費用だけでは不十分なのかもしれない。けれども、それらのコストの一部を保守サポート費用で賄おうということ自体、そもそも筋違いのような気もする。特に企業経営者ならば気づいたはずだ。「何のトラブルもなく安定稼働を続けるデータベースに、果たして毎年数百万円ものカネを払う必要があるのか」と。

「無償保守サポート」を提供する エージータック

データベースの利用には保守サポート費用がつきもの——これは致し方ないことなのか。否、決してそんなことはない。ベンダーの中にも、企業に高額な保守サポート費用の負担を強いることに疑問を呈するところがある。それがエージータックだ。

エージータックは1987年から30年間という長きにわたってデータベース製品「PSQL」を取り扱ってきた。PSQLという製品名に馴染みのない方もいるかもしれないが、「Btrieve」と言えば思いあたる方も多いのではないだろうか。そう、1990年代に一世を風靡したノベルのネットワークOS「NetWare」にバンドルされていた、あのBtrieveだ。

Actian ZenはPSQLの後継製品で、NoSQLインターフェイス（Btrieve）とSQLインターフェイス（ODBC、JDBC、ADO.NETなど）双方のデュアルエンジンを搭載したデータベースなのである。

Zenはそのシンプルなアーキテクチャから、企業システムのデータベースとしてはもちろん、各種業務システムパッケージの組み込みデータベースとしても広く採用されてきた。その最大の特長は下位互換性の高さにある。バージョンアップしても製品の仕様がかわらないため、データベースのバージョンアップ時にアプリケーションに手を加える必要がない。約20年前の1995年にリリースされた「Btrieve 6.15」で作成したデータが、現行バージョンの「Zen v13」でそのまま読み

書きできてしまうほどだ。

シンプルなアーキテクチャで下位互換性が高いということは、技術的に“枯れた”製品ということだ。すでにトラブルは出尽くし、そのトラブルも解決され尽くしているために極めて安定して稼働する。これはZenを利用する企業にとって大きなメリットだが、一方でベンダー側にも「保守サポートの負担が少ない」というメリットをもたらす。

このメリットを利用者に還元するため、エージータックが打ち出したのが「保守サポートの無償化」という施策である。

無償サポートの適用範囲は、製品サポートライフサイクルが終了していない最新現行バージョンに限られるものの、Actian Zenは前述したように基本的にバージョンアップしても下位互換性が保たれている。そのため、安心して新バージョンへとマイグレーションして無償保守サポートを利用できるのだ。

無償保守サポートと言うと、Webサイトに公開されたFAQを参考に利用者が自分で課題解決に当たるセルフサポートが主流だが、エージータックが実施しているのはフルサポートである。無償であってもインシデント無制限で個別にテクニカルサポートを受けることができる。エージータックによると、ほとんどのテクニカルサポートは専用のWebフォームから問い合わせるまで数時間以内だという。個別問い合わせだけでなく、修正版を入手して適用することも可能だ。

また、製品版だけでなく評価版／開発版も無償保守サポートの対象になっている。Actian Zen / PSQLを利用したパッケージやソリューション、アプリケーション開発に携わる企業を支援する「エージータック・ビジネスパートナー（AGBP）」のプログラム（無償）に参加すれば、無償保守サポートはもちろん、各種技術情報、開発ツールなども無償で利用できるのだ。

他のデータベース製品では、もちろん規模によっても異なるが、年間数十万円～数百万円もの費用がかかるはずの保守サポート費用が、Zenを利用すれば一切かからないというだけでなく、TCO（総所有コスト）の削減にも非常に優れている。果たして、すべての企業システムに高額なデータベース製品が必要なのだろうか。それをもう一度吟味し、最適なデータベース製品を選択したいものである。



株式会社エージータック

本社 〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 1-21-1 ヒューリック神田橋ビル 3F
PHONE: 03-3293-5300(代表) FAX: 03-3293-5270

カスタマーセンター PHONE: 03-3293-5283

名古屋オフィス 〒460-0002 名古屋市中区丸の内 3-18-1 三晃丸の内ビル 5F

※本書に記載されている会社名は一般に各メーカーの登録商標または商標です。

<https://www.agtech.co.jp/>